

## 長野県植物誌パイロット版Ⅲ

藤田 淳一<sup>\*1</sup>・大塚 孝一<sup>\*2</sup>・川上 美保子<sup>\*3</sup>・星山 耕一<sup>\*4</sup>・松田 貴子<sup>\*5</sup>・  
中村 千賀<sup>\*6</sup>・上野 勝典<sup>\*7</sup>・石田 祐子<sup>\*8</sup>

## 1. はじめに

本誌 54 号から始まった長野県植物誌パイロット版も第 3 弾となった。集まった原稿や執筆過程の相談内容は、市販の図鑑の内容とは異なり、長野県

内の実情や課題をどううまく文章に反映するのかという具体的な植物誌編纂に向けた準備である。同時に、用語の統一など複数人で作業を進める上での課題、正確な表現等の課題もみられつつある。今回は、8 名による 10 科 64 分類群について紹介する。

## 2. パイロット版

## (1) コケシノブ科 (執筆：上野勝典)

◆ コケシノブ *Hymenophyllum wrightii* Bosch

全県。ホソバコケシノブに似ているが、裂片は軸に対して 50 度以下の狭い角度でつくため、ホソバコケシノブよりも葉身がほっそりした感じに見える。葉柄に翼が付くことが多い。また包膜は 2 弁性で、先端がややとがり二等辺三角形形状になることが多い。針葉樹林下の湿った岩上や樹木上に着生するが、岩上にあることが多い。ホソバコケシノブよりも見つかる頻度は少ない。

◆ コウヤコケシノブ *Hymenophyllum barbatum* (Bosch) Baker

県南部を中心に分布し稀に中部でも見られる。葉の縁の鋸歯が明瞭なため、容易に他のコケシノブ類と区別できる。葉面は濃緑色で独特の油を塗ったような光沢があり、また葉は岩の表面を覆うように広がるため、鋸歯を見なくても見分けられる。葉軸と葉柄の裏側に毛が顕著にあり、この特徴はコウヤコケシノブ亜属 subgen. *Hymenophyllum* の特徴とされる (海老原 2016)。胞子嚢群が発生する直前に羽片の先端に毛玉のようなまとまりができる。主に針葉樹林下の湿った岩上に多く群生する。ホソバコケシノブよりは明るく乾いたところでも生育している暖地性のシダである。

◆ キヨスミコケシノブ *Hymenophyllum oligosorum* Makino

県南部。コウヤコケシノブと同様に葉軸と葉柄の裏側に毛が密生するが、葉に鋸歯はない。包膜はやや欠刻状に波打つ。樹木に着生することが特徴とされるが、木曾谷では岩上に生育しているときもある。西日本を中心に分布する暖地性のシダで長野県には少ない。

\*1 藤田 淳一 長野県松本市 Mail: aegithalos-caudatus@celery.ocn.ne.jp

\*2 大塚 孝一 長野県長野市

\*3 川上 美保子 長野県上田市

\*4 星山 耕一 静岡県静岡市

\*5 安曇野市豊科郷土博物館 〒399-8205 長野県安曇野市豊科 4289-8

\*6 長野市立博物館分館戸隠地質化石博物館 〒381-4104 長野県長野市戸隠栃原 3400

\*7 上野 勝典 長野県松本市

\*8 神奈川県立生命の星・地球博物館 〒250-0031 神奈川県小田原市入生田 499

## (2) キジノオシダ科 (執筆: 大塚孝一)

◆ オオキジノオ *Plagiogyria euphlebia* (Kunze) Mett.

南部に分布。常緑性。葉は孢子葉と栄養葉の二形性があり、孢子葉は直立し羽片が狭く、栄養葉は斜上し葉身は1回羽状複生から複葉になる。葉の二形性は他のキジノオシダ属に共通する。栄養葉の羽片には短い柄があり、特に葉身下部では顕著になる。葉の上部では羽片の下側で延着する。葉身の先端は頂羽片状となる。県内では主に木曽南部や下伊那地域に分布する暖温帯性のシダでは、近年の温暖化に伴い県の中中部や北部にまで分布を広げている種類もあるが、本種やキジノオシダは、南部以外にはいまだ知られていない。

◆ キジノオシダ *Plagiogyria japonica* Nakai

南部に分布。常緑性。葉は二形性があり、栄養葉は葉身が1回羽状複生。オオキジノオに比べて羽片は中軸に延着する傾向が強く、羽片の柄は葉身下部でもないかはっきりしない。羽片は羽片の上側で強く中軸に延着する。若い葉では頂羽片はやや波うつこともあり、葉の先端は切れ込みながら終わり頂羽片状にならないタカサゴキジノオと誤認されることがある。県内からは今のところタカサゴキジノオは見つかっていない。

◆ ヤマソテツ *Plagiogyria matsumureana* Makino

全県に亜高山帯を中心に分布する。夏緑性。葉は二形性があり、1回羽状全裂するが羽片は上部下部ともに中軸に延着する。標高が低いところにも生育することがあり、飯田市座光寺のように暖温帯性のオオキジノオやキジノオシダと混生することがある。

◆ フタツキジノオ *Plagiogyria ×sessilifolia* Nakaike

南部に分布。オオキジノオとキジノオシダとの自然雑種。孢子は不定形。葉形はキジノオシダに似るが、羽片の柄は葉身下部ではややはっきりする。葉身の上部では、羽片の中軸への延着は羽片の上側と下側の両方でおこる。長野県では初確認された大桑村長通川 (SHIN117227) で知られるのみ。

雑種の学名の×について、正式には×と種小名の間は空白を入れないが、入れたほうが見やすいため、空白を入れるか入れないか、要検討。雑種式の学名ではA × B)

オオキジノオとキジノオシダの混生地は多くあるので、今後精査すればもっと見つかると思われる。

## (3) イチイ科 (執筆: 星山耕一)

◆ イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch var. *harringtonia*

中部、南部に分布。常緑小高木。樹皮は暗褐色で、浅く縦裂する。葉は互生し、枝に2列に並び、線形。葉先は尖るが触っても痛くなく、表面は暗緑色、裏面は灰白色の2条の気孔帯がある。開花は3~4月、雌雄異株。果実は翌年の9~10月に赤紫色に熟す。山地のやや湿潤な沢沿いの地に生育する。

◆ ハイイヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch var. *nana* (Nakai) Rehder

全県に分布。常緑低木。多雪地帯に適応した変種で地をはい、多数の幹が斜上する。葉は基本種に似るが、小さい。種子外層は紅色に熟し、イヌガヤのように苦くなく甘いので食べられる。山地のやや湿潤な地に生育する。

◆ イチイ *Taxus cuspidata* Siebold et Zucc. var. *cuspidata*

全県に分布。常緑高木。樹皮は灰褐色か赤褐色で、浅く縦裂する。葉は線形で2列互生し、羽状に並び、表面は深緑色で中央に縦の隆起があり、裏面は目立たない黄緑色の2条の気孔帯がある。開花は3~4月、雌雄異株。果実は9~10月に成熟し、仮種皮は赤色で甘味があり、食用となる。山地帯上部から亜高山帯下部に生育する。

◆ キャラボク *Taxus cuspidata* Siebold et Zucc. var. *nana* Hort. ex Rehder

北部に分布。常緑低木。主幹が不明瞭で幹の下部が地上を這う傾向がある。葉は線形でらせん状に互生し、羽状にならない。整形が容易なため、よく庭園に植えられる。山地帯上部から亜高山帯下部の風衝地に生育する。

◆ カヤ *Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc. var. *nucifera*

中部、南部に分布。常緑高木。樹皮は灰白色で細かく縦列する。葉は線形で、枝に互生し。葉表は暗緑色で光沢があり、裏面は淡緑色で黄緑色の2条の気孔帯がある。葉先は針状で鋭く尖り、触ると痛い。果長は翌年の9月に熟し、仮種皮は緑色。熟すと仮種皮は裂けて褐色の種子が現れる。種子は油が多く食用となる。社寺や庭園など植栽された大木がみられる。低地から山地の湿潤で肥沃な地に生育する。

↓  
樹形や種子の形や大きさに変異が見られ、品種として報告されている。県内ではイナガヤ（下條村 SHIN56662-56664）といわれているものがある。

◆ チャボガヤ *Torreya nucifera* Siebold et Zucc. var. *radicans* Nakai

北部・中部の多雪地帯に分布。根際から多くの斜上枝を出し、高さ3m以下の低木状になる。幹は赤褐色。低地から山地の湿潤な地に生育する。

(4) マツブサ科 (執筆：星山耕一)

◆ シキミ *Illicium anisatum* L.

南部に分布。常緑小高木または低木。樹皮は暗褐色でほぼ平滑。葉は全円、肉厚の革質で互生。葉身は倒卵状楕円形か長楕円形。葉の表面は濃緑色、裏面は灰緑色、中央脈以外は不明瞭で、透かせば油点が見え、ちぎると甘い芳香がある。花は3~4月。淡黄色の花被片で、径2~3cmの花。果実は平たい八角形の集合果で、9~10月に熟す。香気が強く、枝を仏前や神前に供える。有毒である。丘陵地帯にはえる。

◆ サネカズラ *Kadsura japonica* (L.) Dunal 別名：ビナンカズラ

南部に稀に分布。常緑つる性木本。古くなるとコルク層が発達する。葉は単葉で互生。葉身は長楕円形で、葉の表面は濃緑色で光沢があり、裏面は灰緑色。葉縁はまばらに低鋸歯がある。葉柄は赤みを帯びることが多い。花は7~8月、黄白色の花被片で、径1.5cm。果実は10~11月に赤色に熟し、液果の集合果は球形となる。丘陵帯に生育する。

◆ チョウセンゴミシ *Schisandra chinensis* (Turcz.) Baill.

全県に分布。落葉つる性木本。葉は単葉で長枝に互生し、短枝に数枚束生する。葉身は倒卵形または長倒卵形。葉の表面は黄緑色で無毛、裏面は淡緑色で毛は葉脈上にある。葉脈は網目状で表で凹み。裏に突出する。葉縁は小さな凸点状の鋸歯がある。開花は6~7月。花被片は黄白色の花弁状となり、径1cmで芳香がある。果実は10~11月に赤熟し、液果は球形で、集合果は房状に垂れる。山地帯に分布する。

◆ マツブサ *Schisandra repanda* (Siebold et Zucc.) Radlk.

全県に分布。落葉つる性木本。樹皮はコルク層が発達し縦に割れる。葉は単葉で長枝に互生し、短枝に3~8枚束生する。葉身は広楕円形。葉の表面は緑色で光沢があり、裏面は淡緑色、表裏面とも無毛。葉縁は凸点状の鋸歯がある。葉脈は目立たない。開花は5~7月。花被片は黄白色の花弁状となり、径1cm。果実は10月頃藍黒色に熟し、液果は球形で、集合果は房状に垂れる。山地帯に分布する。

◆ ウラジロマツブサ *Schisandra repanda* (Siebold et Zucc.) Radek. f. *discolor* (Nakai) Yonek.

葉の裏面が白みを帯びるもの。大桑村阿寺川。南木曽町清内路峠。

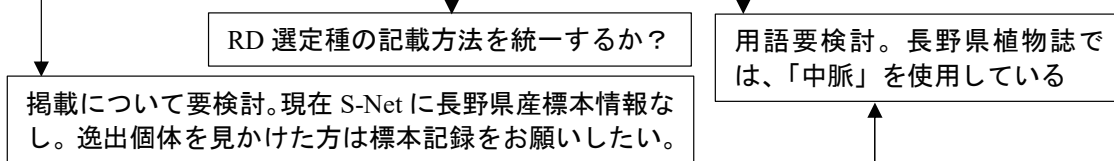
(5) アヤメ科 (執筆: 石田祐子)

◆ カキツバタ *Iris laevigata* Fisch.

全県に稀に分布。葉は長さ50~90cm、幅は1~3cmで、中肋はない。根茎は分枝して多くの繊維に覆われる。花茎は高さ40~70cmで、頂部に径12cm程度の青紫色の花を2~3個つける。外花被の中央から基部にかけて白~淡黄色の筋がある。花期は5~6月。山地の水辺に生育する。長野県版レッドリスト(維管束植物) 2014で、準絶滅危惧種(NT)に選定されている。

◆ シロカキツバタ *Iris laevigata* Fisch. f. *leucantha* Makino ex Nb. Tanaka

木曽・佐久などに分布。花が白色。園芸品種も多数ある。



◆ キショウブ *Iris pseudacorus* L.

全県に分布。西アジア~ヨーロッパ原産で、明治時代に観賞用として輸入された。葉は長さ1mに達することもある。葉の幅は1.5~3cm。葉の先端は細くなり鋭頭。中肋は隆起して明瞭で、葉の中央よりやや外側にづれる。葉は2列に混生する。花は鮮黄色で外花被片は基部に褐色のすじ模様がある。花茎は高さ60~100cmで分枝する。花期は5月~6月。人家周辺の水辺に普通。県内の山地の観光地の水辺に見られることもあり、駆除作業に苦慮している地域もある。日本全国で水辺に栽培または帰化しており、環境省の生態系被害防止外来種に選定され、分布拡大と在来植物種への影響が懸念されている。地下茎での栄養繁殖に加え種子が水に浮いて散布される。

◆ シロバナキショウブ *Iris pseudacorus* L. 'Albiflora'

安曇野市明科湖の報告がある(清水 2005)。花は白色。

◆ ウスギイロキショウブ *Iris pseudacorus* L. 'Pallida'

辰野町しだれぐり公園の報告がある(清水 1998)。花は淡いクリーム色。

◆ アヤメ *Iris sanguinea* Hornem.

全県に分布。葉は長さ 30～50cm、幅 0.5～10cm、中肋は細くあまり目立たない。花茎は高さ 30～60cm。花は径約 8cm で、青紫色。外花被片は広倒卵形で平開し、中央から基部は黄色～白地に、紫色の網脈がある。内花被片は約 4cm と小さくへら形で直立する。花期は 5 月～7 月。山地の草地に普通に見られる。

◆ シロアヤメ *Iris sanguinea* Hornem. f. *albiflora* Makino

阿智村神坂峠、根羽村下小戸名の報告がある（清水 2004）。白花品。

◆ ウスイロアヤメ *Iris sanguinea* Hornem. f. *pallidiflora* Makino

塩尻市東山の報告がある（清水 2004）。花色が薄いもの。

他県では絶滅危惧種に選定されていることもある。現在の分布情報について、情報をお寄せ頂きたい。

SHIN に木曽や飯田市の標本が収蔵されているようなので確認したい。

◆ ヒオウギアヤメ *Iris setosa* Pall. ex Link

県北部に分布。葉は長さ 20～40cm、幅 1.5～3cm、淡い緑色で中肋は細くあまり目立たない。花茎は高さ 90cm 近くなることもある。花はで、青紫色。外花被片の基部には黄色地に紫色のアヤメに似た網目模様があるが、内花被片は著しく小さく長さ 1 cm 程度で目立たず先は針状にとがる。花期は 7 月。北アスプスの山地から亜高山帯、北信の湿原や湿地に見られる。

◆ シロバナヒオウギアヤメ *Iris setosa* Pall. ex Link f. *albiflora* K.Imai

山ノ内町志賀高原東館山の報告がある。白花品。外花被片の付け根が黄色を帯び花被片の脈だけわずかに紫条の残る（今井 1995）

◆ ウスイロヒオウギアヤメ *Iris setosa* Pall. ex Link f. *rosea* K.Imai

山ノ内町志賀高原東館山の報告がある。外花被片が薄紅紫色になる。

◆ キリガミネヒオウギアヤメ *Iris setosa* Pall. ex Link var. *hondoensis* Honda

県の中部に分布。花はやや大きく径 10～30 cm で内花被片は 2.5 cm、先の多少凹んだところに細長い突起があり、ペン先形になる。花期は 7 月～8 月。亜高山帯の湿地に群生。長野県固有種。長野県版レッドリスト（維管束植物）2014 で、絶滅危惧 IA 類（CR）に選定されている。

(6) ベンケイソウ科（執筆：中村千賀）

◆ ベンケイソウ *Hylotelephium erythrostictum* (Miq.) H.Ohba

全県に分布。花茎と葉は緑黄色でわずかに紅色を帯びる。葉は互生または対生し、鈍頭、縁に低く先が鋭い鋸歯があり、基部は鋭形で短い柄がある。花弁は紅色で楕円状披針形。裂開直前の葯は濃赤紫色。草原や明るい林床に生育する。古くから栽培されてきた。

◆ ムラサキベンケイソウ *Hylotelephium pallescens* (Freyen) H.Ohba

中部・東部・南部に稀。花茎と葉は深緑色で葉には柄がなく、縁に低くやや鋭い鋸歯がある。花弁は赤紫色で長楕円形。裂開直前の葯は赤褐色。湿った草原や崖に生育する。

これまでベンケイソウとの誤認がある？情報収集が必要か。



- ◆ ムラサキベンケイソウ *Hylotelephium pallescens* (Freyn) H.Ohba

中部・東部・南部に稀。花茎と葉は深緑色で葉には柄がなく、縁に低くやや鋭い鋸歯がある。花弁は赤紫色で長楕円形。裂開直前の葯は赤褐色。湿った草原や崖に生育する。

これまでベンケイソウとの誤認がある？情報収集が必要か。

- ◆ チチッパベンケイ *Hylotelephium sordidum* (Maxim.) H.Ohba

北部・中部・東部に分布。花茎は斜上。花茎と葉は汚赤紫色をおびる。葉は互生（まれに対生）し基部は漸尖形で柄状、縁は波状かまばらに低い鈍鋸歯がある。花弁はつぼみのときに暗紅色を帯び、花時は淡黄緑色、広楕円形。子房の基部は柄状になる。裂開直前の葯は橙赤色。山地の岩上に生育する。

- ◆ ミツバベンケイソウ *Hylotelephium verticillatum* (L.) H.Ohba

全県に分布。花茎は直立。葉は 2～10 mm の柄があり 3～5 個輪生する。小型の株では対生することもある。葉は縁にまばらに鋸歯があり裏面は白緑色。花弁は淡黄緑色で広披針形。子房の基部は細まるが柄状ではない。裂開直前の葯は淡黄色。岩の露出した林中、明るい林縁、溪流沿いの岩上、河原などに生育する。

- ◆ アオベンケイ *Hylotelephium viride* (Makino) H.Ohba

北部・中部・東部に稀。花茎は斜上。葉は緑色で対生し 1～2 cm の葉柄がある。縁にゆるい波状鋸歯がある。花弁は淡黄緑色で広披針形。子房の基部は柄状になる。裂開直前の葯は淡赤褐色。山地の樹上や岩上に生育する。

- ◆ ツメレンゲ *Orostachys japonica* (Maxim.) A.Berger

全県に分布。ロゼットの葉は多肉で披針形、断面は楕円形、先端に短針状突起がある。花弁は白色で披針形、裂開直前の葯は濃赤紫色。日当たりのよい岩上や河原などに生育する。

- ◆ イワレンゲ *Orostachys malacophylla* (Pall.) Fisch. var. *iwarenge* (Makino) H.Ohba

北部に稀。ロゼットの葉は白緑色、倒披針形で扁平、鈍頭～円筒。裂開直前の葯は黄色。日当たりのよい岩上に生育する。古くから栽培されているので逸出との区別が必要。

長野県植物目録（2017）には逸出品の可能性の記載があるものも。

- ◆ ホソバノキリンソウ *Phedimus aizoon* (L.) 't Hart var. *aizoon*

全県に分布。株ごとに花茎が 1, 2 個直立する。葉は互生し菱状楕円形～楕円形でキリンソウより細く、縁には下半分にも鋸歯がある。花は黄色。山地草原や林縁に生育する。

- ◆ キリンソウ *Phedimus aizoon* (L.) 't Hart var. *floribundus* (Nakai) H.Ohba

全県に分布。花茎は多数束生する。葉は互生し広倒披針形～広倒卵形で、上半分に鈍鋸歯がある。葉の幅が広いヒロハノキリンソウと称される型があるが、現在区別しない。山地の草原、林縁、崖に生育する。

◆ イワベンケイ *Rhodiola rosea* L.

全県の高山の岩礫地に生育する。雌雄異株。花茎は鱗片葉の脇につき、各枝先から 1～5 個ずつ出るため、束生しているように見える。葉は柄がなく長卵形～倒披針形、縁は鋸歯がないか低鋸歯が数個ある。上部に黄緑色の花を密集して開く。果序は赤褐色になり目立つ。

(7) バラ科 (執筆：藤田淳一)

◆ ヒメキンミズヒキ *Agrimonia nipponica* Koidz.

北部、中部、南部に分布する。花期は、7～9 月。他の同属種に比べ、花卉が短く、葯の数が葯半数の 5～6 本程度、葉裏の腺点が少なく、茎葉の小葉のうち先端 3 枚が発達し、あとはないか、極めて小さい。二次林縁や林道のわだちなどにまとまって生育する。本種は、キンミズヒキ *A. pilosa* Ledeb. var. *japonica* (Miq.) Nakai との推定雑種は全県、オオキンミズヒキ *A. noguchii* Seriz. との推定雑種が県北部において確認されている。

本種とキンミズヒキとの雑種は、アイノコキンミズヒキ *A. × nippono-pilosa* Murata というものが記載されているが、実際には、結実し、ヒメキンミズヒキの一型と考えられている。長野県においてキンミズヒキとヒメキンミズヒキの推定雑種は、果実が熟す前に脱落するため不稔である。

◆ オオキンミズヒキ *Agrimonia noguchii* Seriz.

全県に分布するが、北部に多い傾向がある。花期は、7～9 月。キンミズヒキ *A. pilosa* Ledeb. var. *japonica* (Miq.) Nakai に比べ、茎葉の各小葉が丸みを帯び、花卉が長く、托葉が大きく、全草多毛かつ、青みが強く、茎を折るとかすかな柑橘臭がする。二次林縁や草地、道路脇等に生育する。本種は、キンミズヒキの変種 var. *viscidula* (Bunge) Kom. とされることがあるが、キンミズヒキと同所的に生育していても形態的に不連続であるため、本誌では独立種とみなす芹沢 (2008) の説に従った。

県北部の個体群は、より花卉が長く、茎葉の各小葉が明確に丸く、全草の青みが強いものが多い。この型の花序が萎縮したものがダルマキンミズヒキであると考えられる。現在、ダルマキンミズヒキはキンミズヒキの変種 var. *succapitata* Naruh. とされており、このあたりの分類学的再検討がなされることに期待したい。

◆ オオダイコンソウ *Geum aleppicum* Jacq.

北部、中部、南部に分布する。花期は 7～8 月。ダイコンソウ *G. japonicum* Thunb. に比べ、花が大きく、複合果の概形が楕円形 (ダイコンソウは円形)、茎葉の小葉分岐が粗く先端が尖り、托葉が大きく、全草の色が明るい。山地から亜高山帯の林縁や草原に生育し、まれに河川敷等にも生育する。同様の環境にカラフトダイコンソウ *G. macrophyllum* Willd. var. *sachalinense* (Koidz.) H.Hara が生育する。カラフトダイコンソウは、本種に比べ茎葉の頂小葉が大きく、托葉が小さい。

◆ ダイコンソウ *Geum japonicum* Thunb.

北部、中部、南部に分布する。花期は 7～8 月。オオダイコンソウ *G. aleppicum* Jacq に比べ、複合果の概形が丸く、茎葉の小葉先端が丸く、托葉が小さく、全草の色が暗い。根生葉、茎葉の分岐は単純なものから、深裂するものまで変化に富む。山地の林縁や草原に生育する。本種には、展葉が雪解けと同時に始まり、花期が 5～6 月と早い型が県北部の多雪地域を中心に分布しているが、ダイコンソウとの分類学的な位置づけは明らかではない。

葉の細かく深裂するものをコダイコンソウ *f. iyoanum* (Koidz.) H.Ikeda と呼ぶが、同一群落内にダイコンソウとコダイコンソウが混生するほか、同一個体内でも葉の分岐が一定しておらず、少なくとも県内に生育するものでは、コダイコンソウを明瞭に区別することは困難である。

花期の早いこの分類群に対し、クビキダイコンソウ *f. yokouchii* Mizushima を仮にあてているものの、詳細は不明であり、文献、引用標本等、精査をする必要がある。

◆ ヤエザキダイコンソウ *Geum japonicum* Thunb. *f. pleniflorum* Okuhara

八重咲きのもの。県中部に分布。

◆ ノイバラ *Rosa multiflora* Thunb.

北部、中部、南部に分布する。農耕地周辺や河川敷に生育する。花期は 5～6 月。花序は円錐花序で、花柄には線毛が多い。典型品は、茎葉の小葉が丸みを帯び、葉表が脈に沿って網状にへこみ、葉裏は脈上に軟毛を密生する。葉の基部の托葉は櫛状に細裂し、腺毛が生える。極めて形態変異が大きく、モリイバラ *R. onoei* Makino var. *hakonensis* (Franch. et Sav.) H.Ohba、アズマイバラ *R. onoei* Makino var. *oligantha* (Franch. et Sav.) H.Ohba、ミヤコイバラ *R. paniculigera* (Koidz.) Makino ex Momiy. と区別が困難な個体が多い。

近縁種との一代雑種ばかりでなく、一部で浸透性交雑を起こしていると考えているが推測の域を出ない。現時点で「極めて形態変異が大きく」という表現をしているものの、典型品のノイバラの形態を筆者が認識しているのかは甚だ不安が残る。また、筆者が考える典型品は、県内において、河川敷に多いような気がしているものの、どのような地域、立地に生育しているのか把握しきれていない。県外の情報が気になるとともに、ノイバラに関する些細な情報、疑問をお寄せ頂きたい。

(8) アブラナ科 (執筆：上野勝典)

◆ ワサビ *Eutrema japonicum* (Miq.) Koidz

全県。根茎は発達し、太い円柱。一年中葉を付け、葉は円形で表面は光沢があり、縁に波状の鋸歯がある。花時には有花茎は直立し、先端に集まって花を付ける。葯は紫色を帯びるものが大半で、萼は斜開し漏斗状なので花卉は開き気味となる。全体に大型。湿地や沢沿いの湿った場所に生育、県内では栽培も盛んに行われており、山地の沢に逸出したと思われるものも多く見られる。開田高原には、通常ワサビと異なる、ワサビとオオユリワサビの中間的な形態をもつものがある(上野・上野 2017)。



◆ ユリワサビ *Eutrema tenue* (Miq.) Makion

県北部、中部、南部に分布。根茎は発達せず、細く短い。一年中葉を付け、葉は卵心形で、表面は光沢が無く、波状の粗い鋸歯がある。花時にも有花茎は細く地面を這う。花は茎の先にまばらに付ける。葯は黄色で、萼は壺状に直立し、花糸の基部が見えにくい。全体に小型。湿地や沢沿いの湿った場所に生育。

◆ オオユリワサビ *Eutrema okinosimense* Taken

県北部、中部に分布。根茎は発達せず、葉は卵心形で表面は光沢が無く、波状の粗い鋸歯がある。また葯は黄色で、萼は壺状に直立し、花糸の基部が見えにくいなどの点はユリワサビに似る。苞葉の柄はユリワサビやワサビと比べて短い特徴がある。全体に大型で、花は茎の先端に纏まって付き、果実を作った後の夏場に、地上部の普通葉をなくし鱗茎葉だけが残し、秋に新しい葉と根を出す点で異なる。湿地や沢沿いの水の流れの近くに、時として大きな群落を作る。

2000年にオオユリワサビの再評価（鳴橋・梅本・若林 2000）が行われた。長野県では従来オオユリワサビをユリワサビと認識されていたものがあり、分布の再検討が必要。

## (9) ムクロジ科（執筆：松田貴子）

◆ ハナノキ *Acer pycnanthum* K.Koch

南部・北部に分布。雌雄異株。樹高 30m になる落葉高木。葉は 3 浅裂し、縁に欠刻状の重鋸歯がある。葉裏は粉白色を帯び、基部の脈腋および脈上に少し毛がある。分果は長さ 2.5cm、果翼は直角ないし鋭角に開く。低山帯～山地帯の湿地や谷などの湿潤地にまれに自生。岐阜・長野両県南部および愛知県北東部の 3 県県境一帯に自生し、大町市の居谷里湿原に隔離分布する。日本固有。別名ハナカエデ。

◆ アサノハカエデ *Acer argutum* Maxim.

全県に分布。雌雄異株。樹高 8m ほどになる落葉小高木。葉は 5（-7）裂し、縁に細かい重鋸歯がある。葉表の葉脈が凹入し細かいシワ状となる。葉裏の毛ははじめ短伏毛が密生するが、のちに脈沿いに残る程度となる。果序は下垂し、分果は長さ 2～2.5cm、果翼はほぼ水平に開く。山地の多少湿った林内にみられ、崩壊地などにも多い。低山帯～亜高山帯下部。日本固有。

葉裏の毛については図鑑によって「脈沿いに少しある」「短伏毛を密生」と幅がある。標本を確認する必要がある。

◆ カラコギカエデ *Acer tataricum* L. subsp. *aidzuense* (Franch.) P.C.de Jong

全県に分布。雄性同株。樹高 2～5m になる落葉小高木。葉は 3 浅裂またはほとんど切れ込まず、縁に欠刻状の重鋸歯がある。葉裏の脈上にまばらに軟毛がある。果序は直立し、分果は長さ 3cm、果翼は鋭角に開くかほとんど平行。低山帯に普通。

◆ ウリカエデ *Acer crataegifolium* Siebold et Zucc.

全県に分布。雌雄異株。樹高 8m ほどになる落葉小高木。若い樹皮は帯青緑色。葉は 3 浅裂または不分裂で、縁に小さい鋸歯があり、先端は尾状となる。葉裏の脈腋や脈上に褐色の毛が少しある。果序は下垂し、分果は長さ 2cm 内外、果翼はほぼ水平に開く。低山帯に普通。別名メウリノキ、メウリカエデ、オオバウリカエデ。日本固有。

◆ ウリハダカエデ *Acer rufinerve* Siebold et Zucc.

全県に分布。雌雄異株まれに同株。樹高 5~15m になる落葉高木~小高木。若い樹皮は緑色で黒斑がある。葉は 3~5 浅裂し、縁にふぞろいの重鋸歯がある。葉裏の脈状に赤褐色の毛があり、葉腋には毛叢がある。果序は下垂し、分果は長さ 2~3cm、果翼は鈍角に開く。低山帯~亜高山帯下部に普通。日本固有。

◆ ホソエカエデ *Acer capillipes* Maxim.

中部・東部・南部に分布。雌雄異株。樹高 10~15m になる落葉高木~小高木。若い樹皮は緑色で黒斑がある。葉は 3~5 浅裂し、縁に細かい重鋸歯があり、先端は尾状となる。よく似たウリハダカエデとの葉の違いは、葉裏がほぼ無毛で、脈腋に水かき状の膜があることである。果序は下垂し、分果は長さ 1.3~1.8cm、果翼は鋭角に開く。低山帯に自生。日本固有。別名ホソエウリハダ、アシボソウリノキ

◆ テツカエデ *Acer nipponicum* H.Hara (広義)

北部・東部に分布。雄性同株ときに雄性異株。樹高 18m ほどになる落葉高木。葉は 5 浅裂し、表面の細脈は凹入しシワ状となり、縁にふぞろいの重鋸歯がある。ウリハダカエデとホソエカエデには葉柄上面に溝があるが、テツカエデにはない。果序は下垂し、分果は長さ 2.5~3.5cm、果翼は鋭角ないし鈍角に開く。低山帯上部~亜高山帯に自生。日本固有。

テツカエデを基準亜種サイゴクテツカエデ *subsp. nipponicum* と亜種キタノテツカエデ *subsp. orientale* T.Yamaz. の 2 亜種に分け、さらにそれぞれを 2 変種とする説がある(山崎敬, 植物研究雑誌 75 巻, 2000)。これによると、長野県のテツカエデは亜種キタノテツカエデの狭義のキタノテツカエデ *subsp. orientale* T.Yamaz. var. *orientale* T.Yamaz. が北部に分布し、コウシンテツカエデ *subsp. orientale* T.Yamaz. var. *koshinense* が東部に分布する。キタノテツカエデは葉裏に淡赤褐色の軟毛があり、コウシンテツカエデは葉裏の主脈上にまばらに縮れた灰白色の軟毛がある。



改めて標本を確認する必要がある。

◆ ヒトツバカエデ *Acer crataegifolium* Siebold et Zucc.

全県に分布。雄性同株。樹高 5~10m ほどになる落葉高木~小高木。葉は分裂せず卵状円心形で、縁に低い鈍鋸歯がある。成葉ではほとんど無毛。果序は直立し、分果は長さ 2.5~3.5cm、果翼は鋭角に開く。低山帯の山腹や谷沿いに普通。別名マルバカエデ。日本固有。

- ◆ チドリノキ *Acer carpinifolium* Siebold et Zucc.

全県に分布。雌雄異株。樹高 5~10m になる落葉高木~小高木。葉は分裂せず長楕円状披針形で、基部は浅心形または円形。縁に揃った鋭い重鋸歯がある。はじめ伏軟毛が多いが、のちに葉裏脈上のみ有毛。果序は下垂し、分果は長さ 2.5~3cm、果翼は直角に開くものが多い。低山帯~亜高山帯の沢筋に多い。日本固有。別名ヤマシバカエデ

- ◆ メグスリノキ *Acer maximowiczianum* Miq.

全県に分布。雌雄異株。樹高 25m になる落葉高木。葉は 3 小葉で、小葉は楕円形、縁には波状の大きな鋸歯があり、先は鈍頭である。成葉では表面は無毛で、裏面や葉柄には粗毛が多い。分果は長さ 4~5cm と大きく、果翼は平行ないし鈍角に開く。低山帯の湿潤地に自生。別名チョウジノキ。

(10) ハエドクソウ科 (執筆: 川上美保子)

- ◆ ミゾホオズキ *Mimulus nepalensis* Benth.

北部、中部、南部に分布。茎は分枝して広がり、葉は対生し卵形で、明らかな柄がある。萼は筒形で 5 つの稜があり陵の先端は突起になる。花は黄色。山地の水辺に生える。和名は果実が萼に包まれホオズキのように見えることに由来する。

- ◆ オオバミゾホオズキ *Mimulus sessilifolius* Maxim.

北部、中部、南部に分布。茎は直立しほとんど分枝せず、葉は卵円形で柄がない。花は黄色でミゾホオズキより倍くらい大きく、上部の葉腋に 1 個ずつつく。亜高山帯の水辺に生える。

- ◆ ニシキミゾホオズキ *Mimulus luteus* L.

北部に分布。チリ原産の帰化植物。茎は直立しよく分枝して横に広がる。葉は広卵形から心臓形で、対生して短い柄がある。花は濃い黄色、花期は夏から秋。本種は長野県環境保全研究所標本庫 (NAC) で標本が発掘され長野県の植物相に加えられた (石田 2017)。

- ◆ ハエドクソウ *Phryma nana* Koidz. (= *Phryma leptostachya* L. subsp. *asiatica* (H.Hara) Kitam.)

北部、中部、南部に分布。葉は幅広く卵円形で基部は切形になる。花は細長い穂状花序で、花冠は上唇と下唇の 2 唇形となる。唇弁は短く、3 裂する下唇の裂片は丸みがある。林内や林縁の日陰に生育する。東アジアの種類は北アメリカの種類の亜種とされてきたが、花形態の相違から独立種として扱われる (遠藤他 2014)。

- ◆ ナガバハエドクソウ *Phryma oblongifolia* Koidz. (= *Phryma leptostachya* L. subsp. *asiatica* (H.Hara) Kitam. f. *oblongifolia* (Koidz.) Ohwi )

北部、中部、南部に分布。葉は幅狭く長楕円形で基部は楔形となる。唇弁はハエドクソウに比べやや長く、3 裂する下唇の裂片はやや長い。葉の裏面の脈は粗にでる。本種は最初ハエドクソウとは別種として記載されたが、種内変異として葉が細長い変種や品種のランクで扱われてきた。しかし花の形態なども異なることから独立種として扱われる (遠藤・宮内 2017)。

### 3. おわりに

文章を書き進めていくと、さほど難しくない特徴的な種であっても、県内の実情を把握するためには、現地や標本調査が必要な分類群が散見される。また、当たり前のように使用している用語も統一感を持たせるとなると、その用語の意味、用法を執筆者間で共有するというコミュニケーションの重要性など当たり前のような課題も未来の植物誌執筆者のためにもこまめに記録をしていった方が良いと感じている。毎回のことではあるが、本稿の内容について、ご意見、情報等あれば、忌憚なくお寄せ頂きたい。

### 4. 参考文献

- 海老原淳 (2016) 日本産シダ植物標準図鑑 I .310pp. 学研, 東京
- 遠藤泰彦・宮内智成・三戸智規 (2014) 東アジアと北米東部に隔離分布するハエドクソウ属 (ハエドクソウ科) の花部構造の相違. 植物研究雑誌 (89): 394-408
- 遠藤泰彦・宮内智成 (2017) 日本産ハエドクソウ属 2 種の輪郭. 植物研究雑誌 (92): 1-11
- 今井建樹 (1995) 長野県の植物覚書. 長野県植物研究会誌 (28) :25-28
- 石田祐子 (2017) 長野県植物誌に追加すべき種類; N A C 標本から. 長野県植物目録 (2017) : 221-224
- 神奈川県植物誌調査会・編 (2018) 神奈川県植物誌 2018 (上).719-729pp. 神奈川県植物誌調査会, 神奈川
- (三河の植物観察) Flora of Mikawa, <https://mikawanoyasou.org/data/morimuramannengusa.htm> (2023 年 1 月 17 日閲覧)
- 長野県外来植物目録編纂委員会・編 (2018) 長野県外来植物目録.18pp. 長野県外来植物目録編纂委員会
- 長野県自然保護研究所・長野県生活環境部環境自然保護課・編 (2002) 長野県版レッドデータブック 維管束植物編.147pp. 長野県自然保護研究所・長野県生活環境部環境自然保護課
- 鳴橋直弘・梅本康二・若林孝生 (2000) オオユリワサビ、その生活と分類学的位置. 植物地理・分類研究 48:141-148
- National Museum of Nature and Science Science Museum Net (S-Net), <http://science-net.kahaku.go.jp/> (2023 年 1 月 14 日閲覧)
- 長野県植物目録編纂委員会・編 (2017) 長野県植物目録 (2017 年版).88-89pp. 長野県植物目録編纂委員会
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司・編集 (2015) 改訂新版 日本の野生植物 1.391pp. 平凡社, 東京
- 大橋広好・門田裕一・木原浩・邑田仁・米倉浩司・編 (2016) 改訂新版 日本の野生植物 2.215-229pp. 平凡社, 東京
- Hideaki Ohba (1991) Two new taxa of *Hylotelephium* from Japan (Crassulaceae). 植物研究雑誌 (66) 63-69
- 芹沢俊介 (2008) キンミズヒキの再検討 (2) 分類学的考察. シデコブシ (Shidekobushi) 1:37-44
- 清水建美・監修 (1997) 長野県植物誌.632-637pp. 信濃毎日新聞社, 長野
- 清水建美・監修 (1997) 長野県植物誌.1735pp. 信濃毎日新聞社, 長野
- 清水建美 (編) (1998) 「長野県植物誌」補遺. 長野県植物研究会誌 (31) :40-43
- 清水建美・編 (2003) 日本の帰化植物.98-99pp. 平凡社, 東京
- 清水建美 (編) (2004) 「長野県植物誌」補遺 (7). 長野県植物研究会誌 (37) :73-80
- 清水建美 (編) (2005) 「長野県植物誌」補遺 (8). 長野県植物研究会誌 (38) :127-131
- accessed through Science Museum Net (S-Net) data portal, <http://science-net.kahaku.go.jp/> (2022 年 12 月 22 日閲覧)
- 上野勝典・上野由貴枝 (2017) 開田高原に自生するワサビの特徴について. 長野県植物研究会誌 50:187-191
- 米倉浩司・梶田忠 (2003-) BG Plants 和名一学名インデックス (YList), <http://ylist.info/> (2023 年 1 月 14 日閲覧)